



story by avamura akamitsu
Illustrations by kakage

あわむら赤光 — イラスト かがげ

百神百年大戦

ひやくしん
ひやくねん
たいせん

第一章 選ばれた少女

その少女のフルネームは、腰下まで伸びた彼女の髪同様に、とても長つたらしいものだった。

ミリアルージュ・カレンシア・アーダヴァイレルト・エーンケスター。

——というのがそれだ。

細かく意味を見ていくと、「エーンケスター」王国を統治する「アーダヴァイレルト」家の正統で、正妃「カレンシア」の息女である「ミリアルージュ

ユ」となる。

つまり、彼女は王女様だった。

（王女様のはずなのよねえ!? しかも第一の!）
生まれてこの方、十六年。もう何度そんな風に、
自問したただろうか。

彼女は、王宮の外壁を汚すラクガキを、一生懸命、
掃除していた。

別に王家に対する誹謗中傷や、社会的鬱憤から出
た風刺の類、あるいは冒瀆的新思想の自己陶酔的な
啓蒙文が書かれているわけではない。

今や、そんなことを書いてくれる者すら、王宮な

んかには寄りつかない。

近所の悪ガキどもが暇に飽かせて書き殴った、正真正銘のラクガキだ。イタズラだ。

ただ、量が半端はんぱじゃなかったの、端から端まで消すのが骨だった。

水を湛たたえた真鍮しんちゆうのバケツへ、乱暴にモップを突っ込んで、どっころさせー、よっころさせー、と壁の汚れをこすり落とす。

その豪快な仕種しぐさと手慣れ感は、とても深窓の王女様のそれではなかった。

せっかくの愛くるしい顔も、ため息が出るほど美しい光沢を帯びた髪も、台無しも台無し。

そもそも彼女は今、ほっかむりをして美貌も髪も隠していた。

服装も汚れていいように、女官たちが着るお仕着せ姿。

朝も早よから精を出しているところ――

「姫様ー！」

「ミリア様ー！」

大きな呼び声が、正門の方から聞こえた。

城付の兵士たちの声だった。

アーダヴァイレルト王家では、正式な場での名乗りのみ、フルネームを使うのが礼儀作法とされる。普段は愛称を使うし、家臣たちにも呼ばせる。

ゆえにミリアと呼ばれた彼女は、掃除の手を止めずに、声のした方を振り返った。

三人の兵士が、息せき切った様子で走ってくると、「おやめください、ミリア様！ そのような雑事、わたくしどもがやりますっ」

「そうです！ オレたち兵士なんて毎日、暇なんですから！」

おろおろとした様子で訴えてくる。

ミリアは彼らの気持ちや誠忠はうれしく思いつつも、

「いいのよ。こんな仕事、それこそあなたたちに
はさせられないわ」

一旦、モツプを壁に立てかけ、腰に手をやりながら断言した。

「し、しかし……」

「いいんだってば！　ウチは超貧乏だから、女官も兵士もろくに雇えないわけ」

自分で言っつて嫌になる台詞せりふだが、事実だ。

城で働く全員を合わせても、たったの四十人ぼつち。

百年前なら「そんな王家があるかよ！」と笑い話である。

「なのに城だけはクツソ広いしね。万年、人手不足なんだから、こんな雑事は私がやるわよ。とい

うか、我が王家に仕えてくれるあんたたちに、こんな雑事はさせられない」

「姫様……っ」

「ミリア様っっ」

兵たちは感激しつつも、だがしかしといった様子で、

「お言葉はありがたいのですが、わたくしたちが暇なのは事実なんです」

「この国は平和すぎて、兵士の仕事なんてほぼ皆無ですし……」

「だから、ここは我々に任せて……」

「だまらっしやい！」

今の台詞は聞き捨てならず、ミリアは兵士たちを喝破した。

「あんなたたちの仕事は、ラクガキ掃除なんかじゃないわ！ 民の前で威張り腐って、我が王家の権威を高めることですよ！！ わかったらさっさと正門で通行人にガン飛ばしてなさい！」

「ひ、姫え……」

「それはあんまりな仰りおつしやようかとお……」

「しかも権威と仰るならば、第一王女たるミリア様がこんなところでラクガキ掃除をなさるのは、外聞が悪くなりませんか……？」

「だから私、ほっかむりして隠してるでしょ？」

「……」

ミリアの主張を聞いて、兵士たちは一様に押し黙った。

その表情には「全然、隠せてないです」「むしろ城下町中に知れ渡ってます」と書いてあるのだが、ミリアは気づかなかった。

「とにかく、薄給をさらに薄っすくされたくなかったら回れ右！」

「ははは……これ以上、薄いのは勘弁していただきたいたですな」

「姫様には敵かなわない」

「いや、怖い怖い」

兵士たちはどこか温かみのある苦笑いを浮かべつつ、結局は従ってくれた。

ミリアも安心して、掃除の続きに戻るこゝろができる。

（そうよっ。これ以上、我が王家が舐められて堪るもんですか！）

唇を尖らせ、憎しみすら込めてモップを壁にガシガシやる。

ただし、ラクガキの主への恨みではない。

まあ、少しもないと言えは嘘になるけれど、子どもたちが本当に楽しそうに遊んでいる様が、思い浮かぶようなラクガキなのだ。

正門から南西の角まで五百メートルはある壁を、広々キャンバスに使って絵を描いたら、そりゃ気持ちいいだろう。

問題の根幹は、仮にも王宮の外壁が——王家の権威の象徴が、子どもたちの遊び道具にされていることだ。

アーダヴァイレルト王家の威光が失墜し、民に畏敬されていないということだ。

ゆえにミリアは、その原因を作った連中を憎む！

ミリアが生まれる遥^{はる}か昔、天から神を自称する

生き物たちが降ってきた。

その当時、この南大陸デナースには大小、五十を超える国々が群雄割拠していたというが、そのことごとく尽くがわずかの間に、神々に屈服させられた。

デナース最大最強のウエスパールラント帝国軍は、内陸部にあるベルベツファール平原に十万の兵を並べ立てたが、雨の神が起こした洪水の中に一瞬で呑み込まれた。

黒炎の神に恭順しなかったホランド王国は、一夜にして都を灼熱地獄しゃくねつに変えられた。その炎は百年経った今でも消えることなく、ホランド王の魂は成仏することもできず、紅蓮ぐれんに包まれた城下を

彷徨^{さまよ}い歩き、己^{おのれ}の誤った判断を嘆き悲しんでいるという。

神々のカ——すなわち《神威^{かむい}》に、対抗できる国や人などこの地上には存在しなかったのだ。

タイクーン世界はたった七日で、その様相を一変させた。

人々は国に属し、王に恭順するのではなく。

サンクチユアリ^{サンクチユアリ}聖域に属し、神に信仰を捧^{ささ}げるようになった。

では、王家はどうなってしまったのかというところ

神々は彼らをも人類代表と認め、人々を束ねて政を行おう機
関として、最低限の自治権を認めた。

王権神授説を謳う王家は昔から多かつたと聞
くが、まったく皮肉なことに、それが最悪の形で現
実となったのだ。

そう、最悪である。

神々は王家から、税を徴収する権利だけは奪った。
それらは代わりに神殿へ、喜捨として収められ
ることになった。

そして、その中から雀の涙ほどの金額を、王家
に運営費として「神授」されるのだ。

下世話な話、唸るような金がなくて、権力な

ど実態を伴わない。軍隊ですらもう維持・経営で
きないのだから、恐くもなんともない。

結果として——あらゆる王家は形骸化した。

ほとんど名ばかりの存在となつて、毎年「神授」
されるお金を這はいつくばって頂戴し、それをやり
くりして生き永らえているというのが現状である。

民にもその実情はバレツバレだから、

「なんかエラソーにしてるけど、ぶっちやけ空気
だよね」

「わかる。いてもいなくても関係ないよね」

「え、でも、私がしつこいナンパで困つてたら、
兵士さんが守つてくれたし、助かったかな」

「まぢで？　ウチが泥棒に入られた時は、捕まえるまでどんだけ時間かかってんのよって……」

「まあ、たまには頼りになるけど、頼りにならない時も多たって感じよねー」

「本当に困った時は、神殿に駆け込むよねー」

「まぢそれー」

みたいな感じに思われている。

ミリアの生まれたアーダヴァイルト王家もまた、その例外ではなかった。

極貧で、民からもミジンコみたいに思われていた。

（私だっつて！ 私だっつて！ あと二百年早く生まれ
てたら、蝶ちようよ花よと育てられてたし、たっくさ
んの女官に傳かずしたし、好きなだけおめかしして、
好きなだけお菓子食べて、毎日なに不自由なく暮
らせていたのよ！ こんな重いモツプ持ってラク
ガキ掃除なんてしてなかったのよ！！ ああもう全
部、神々あいつらのせいっ！！）
恨みつらみを原動力に、ミリアはぜえはあ言い
ながら掃除を終える。
こんな情けなくなるような重労働でも、やり遂
げればそこはかとなない達成感があるもので、額の
汗を拭ぬぐいっつ、イイ顔をして王宮に帰る。

町のど真ん中にある平城だ。ひらじろ

正門を抜け、往時は閲兵場も兼ねたという前庭を通った先に、城の正面玄関がある。

扉は縦五メートル、両開きで分厚い、威圧的なもの。

だが、もう長いこと建て付けが悪くなっただまま修繕もできず、開閉が大変だということ、常時開けっぴろげになっていた。

どうせ金目のものなんて、この百年の間にあらかた売っ払ってしまったので、泥棒だっってこんな貧乏城を狙ねらいはしない。

内装だっってあちこち痛んでいるが、修繕するお

金はないし。

女官たちの手が回ってないから、無駄に三つもある中庭なんて、雑草が生え放題だし。

これってなんとかして美味しく料理できなの？ そしたら食費が浮くじゃない——なんて、ミリアは本気で周りに諮問しもんしたことがあるし。

「ハア、ため息しか出ないわ。逆さに振っても銅貨一枚出ないわ」

御伽噺おとぎばなしに出てくるような「お姫様」のイメージを、真っ向から打ち壊しにかかる台詞を吐きつつ、城の厨房ちゅうぼうに向かう。

盛時には毎晩の如くごと晚餐会ばんさんを開いていたと伝え

聞くし、厨房もそれを支えられるだけの巨大なもののだが、今はもうその広さがかえって虚しくなるほど、閑散としていた。

テーブルがいくつか置いてあって、そこで作ったものをすぐ食べられるようにしてある。

ミリアももうメンドイし、無駄に他の部屋を使うと床がすり減るし、家具も傷むので、食事は毎日ここで済ませている。

使用人たちと一緒になっても別に気にならない。というか、和氣藹々として楽しい。

「ハア、お腹空いた」

食べ盛りの年頃の、女子の本音を盛大に呟きな

がら厨房に入る。

すると、中に妹がいた。テーブルの端にちよこんと座って待っていた。

ミリアより三つ年下の十三歳で、面影はよく似ている。ただ、髪は妹の方が短い。名前はいーネリーア。愛称はフィーナ。

ちなみにミリアの家族構成——というかこの城に住んでいる王族——は、病弱で政治の一線から退いている父国王と、平民上がりでガサツだけど夫を溺愛する正妃の母、それにこの妹を合わせた四人となっている。

「あんだ、まだ食べてないの？ さっさと準備して、

先生ンとこに行きなさいな」

ミリアは説教顔でフイーナに諭す。

「あたしだってお腹、空いたもん。でも、トリモンが風邪かせで休んでるの。それで姉様を待ってたのよ」

最近ますますこまっしやくれてきた妹が、したり顔で反論してきた。

「……まあ、それならしょうがないわね」

トリモンは城の厨房を一手に取り仕切る料理人だ（というか二人雇う余裕がない）。

他の女官たちも料理はできてるが、午前の仕事でいつぱいてすきいつぱい。手隙てすきになるのを待っていたら、

それこそお昼が来てしまう。

「じゃあ、私が作ってあげるけど、文句言わずに食べるのよ？」

「はい」

返事だけはいいいいファイーナを尻目しりめに、ミリアは竈かまどの前に立った。

五徳の上にフライパンを置く。

一方、竈の中には薪まきや炭の用意もない。完全に空っぽだった。

ミリアは慣れたもので、右の人差し指を一本立てる。

そこには銀製の指輪がはまっている。

デザインは素っ気ないものだが、窓から差し込む朝日を受けて、神秘的な光沢を放っていた。タイクーンの人々が、今や誰だれでも身に着けている装飾品だ。

その指で、ミリアは火の印字を切る。同時に強くイメージする。

たったそれだけの簡単な行為で——竈の中が発火した。

薪や炭といった燃料を一切使いつさいわず、ひどく安定した火力をフライパンにもたらしてくれた。まさしく魔法の如しであった。

神々は巫女みこを通して、《龍脈》から莫大ばくだいな地素ガイアを得るのだという。

だが、戦時以外は特に必要のないものなので、薄めて周囲に発散する。

しかもこれが、サンクチュアリ聖域一帯に行き届くほどのエネルギーになる。

それを指輪が受け止め、使用者の意思こたに伝えて、ささやかな魔法めいた力を発現するという仕組みだった。

ミリアも他の誰も、詳しい原理を知ってはいないが、便利に使っている。部屋の中を明るくする。湯を沸かす。暑さ、寒

さを緩和する。風邪の症状を軽くする。などなど、生活に密接した様々な使い方ができるとののだ。

指輪の効力は一年しか保もたず、人々は毎年、神殿に納税——もとい喜捨へ行つて、新しいものをもらつて帰る決まりになっている。

神々やその眷属ガーズたちは、「聖なる指輪」だとか「幸せの指輪」だとか呼んでいる。

実際、この指輪なしにはもう、タイクーンの人々は生きていけないだろう。

神々が特に信仰を強要せずとも、人々が勝手に彼らを崇敬するのは、これが理由だ。これほど実感を伴う現世利益もないだろう。

ミリアはフライパンを火にかけたまま、貯蔵庫を漁^{あさ}った。

中に収められた食材は全て、やはり指輪の力で、新鮮な状態のまま保たれている。

ミリアは豚肉といくつかの野菜を取り出す。それから瓶^{びん}に溜^たまった水を鍋に掬^{すく}い、指輪の力で清潔に変えてから、食材を洗う。

「姉様って普段、神様のことが憎い憎いって言うてるけど、これでもかっけてくらい指輪の力を使い倒してるよね……」

「悪い？ 私はもらえるものは銅貨一枚だっても

らうし、借りられるものは猫の手だつて借りる主義なの」

「悪くはないよ。業突く張りつてか、たくま遅しいなつて思うけど」

「将来、この国を立派に治める、女王の器つて言つて頂戴」

「すぐ自分をいい方に言つてアピールするのも、王族向きの性格だよあきね……」

フィーナは呆れ顔になつたが、背を向けているミリアには見えない。

軽口を応酬している間にも、ミリアは包丁で食材を豪快に切つて、適当にフライパンへ放り込んで、

炒め始めた。そのフライパンさばきはまさに大胆そのものだった。

「お姉ちゃんて、見た目だけは美少女なのにね……」

姉の凄まじい料理姿を見て、フィーナが嘆息した。「ん？ よく聞こえなかったけど、フィーナは朝ご飯要らないって？」

「中身はもはや聖女って言ったの！」

「何よ、この子ったら。お世辞なんて覚えてやあねえ。ヲホホホ」

「ハア……」

ミリアの上機嫌な笑い声の中に、フィーナの新

たな嘆息がこっそり消えた。

「はい、できたわよ。しっかり食べていきなさい」
ミリアは豚肉と野菜を塩コショウで炒めただけの、豪快な料理を皿に盛って出してやる。

しかし、フィーナは物言いたげな視線を落とすばかりで、手を付けようとしなない。

「何よ？」

「……女の子の朝食って感じじゃないよね、コレ」
「まーたあんたは！ だから、文句言うなって最初に釘差したのにつ」

ミリアは目を尖らせた。

「いゝい？ このブタさんも！ キャベツさん

も！ ニンジンさんも！ 大昔、うちの王家に世話になっただからって、未だいまに恩に思ってくれる感心な農家さんが、届けてくれたものなのよ？ それに文句つけたらあんだ、餓死する呪のろいがかかるわよっ」

「食材じゃなくて、調理法に文句言ってるのになあ……」

まあいいわよ、みたいな渋々態度でフイーナは皿にフォークを伸ばした。

「あたしも料理できるように、練習しようかなあ……」

「あんたはそんなことしなくていいの。私と違っ

て頭がいいんだから。先生ンとここでみっちり勉強して、将来の私を支える名臣になっけてくれなきゃ」

「ハイハイ姉様のためにね」

フィーナは嫌み口調で言ったが、結局、気づけばペろつと平らげていた。

こいつだつて食べ盛りの年頃なのだ。

フィーナは、皿は自分で洗おうとした。

「それも私がやつとくから。あんたは早く行きなさいつてば」

「姉様ってホントは優しいよね。世話焼きつていうか」

「ハア？ 回り回って私自身のためよ。あんたが

さつき言っただばかりでしょ？」

ミリアは取り合わず、自分の皿を平らげるとに忙しかった。

我ながら塩加減が絶妙！ と悦に入っている。

「じゃあ、行ってきまーす」

フィーナはそう言ったが、なぜか突っ立ったまま、窓の外をしげしげと見ていた。

この厨房は、中庭の一つにつながっている。

「光輝満つる園」という大仰な名で、百年前には盛んに園遊会だの晩餐会だのが開かれていたと、亡き祖父が言っていた。

しかし今は、一面の雑草で覆われるばかり。

どれも丈が高く、しかも強靱無比きょうつじんで、あたかも人の進入を拒んでいるかのよう。

それらを見回してか、フィーナがコメントする。

「雑草、また伸びたねー」

「春だもの、そりゃ伸びるでしょ」

「冬の間には抜かなくてよかったの？」

「手が回らなかったのよ！ どうせもう誰も使やしないんだし、放置よ放置」

「でも、外の壁にラクガキされたら、必死で消してるじゃない」

「あそこは民の目につくんだから当然でしょうが。無様なトコは見せらんないわよっ」

同様の理屈で、前庭だけはしつかり芝生も整え、手入れをしていたり。

「でも、王宮の奥なんて誰も入ってこないんだから、汚城おしろになってようが汚庭おにわになってようが、一向に構やしないわよ！」

「姉様って見栄っ張りだよねー……」

「私はそんな低次元の話をしてんじゃない！」
ミリアは食事を中断し、居住まいさえ正して懇々と諭した。

「あんたはイマイチわかってないようだから、はつきりと言うわよ？」

私はもうこれ以上、このアーダヴァイレルト家が舐められるのは、ガマンならないの。そして、この私の代のうちに、必ず王家の権威を復活させる！

それがこの私に、ご先祖様たちが与えた使命よ」
エーンケスターは小国である。

町の数もこの王都を合わせ、たった四つしかない。それでも、とても栄えた土地だった。

そもそもが中央大陸アルルーカーンからの玄関口になる交易の要衝だし、都の周りは森林資源が豊かだし、ポラリス沃野よくやが実らせる農作物と、タタン鉱床を中心

とする重工業、さらにはヴェステルの温泉街で活
発な観光業が、国土面積以上の繁栄を王家にもた
らしてくれた。

代々の王もまた、善政を敷いてさらに国と民を
富ませ、周辺諸国には毅然きぜんとにらみを利きかせて侵
略など許さなかつた。

ミリアとフィーナにも、そんな賢王たちの血が
流れているのだ。

彼らの裔すえとして、アーダヴァイレルト王家を盛
時の姿に戻すのは義務であり、決して不可能では
ないはずだ！

果たして、フィーナは答えた。

「うん……私だっけてわかってるよ、姉様。だから、いくらでも協力するつもりだし——」

そう言ってくれつつも、この賢明な妹は、やはり窓の外へ視線を向けたままだった。

物憂げな横顔のままだった。

「でも、姉様？　じゃあ……あれはいいの？　許していいの？」

窓から中庭を指すフィーナ。

さつきからいったいなんだというのか？　いったいそこに何があるというのか？

ミリアは席を立つと、己の目で確認した。

もを追い回したのだった。

十

——という大騒動の後である。

「ホントにやんなっちゃうわ。あいつら、王宮を遊あそび場だと勘違いしてんのかしら？ まあ、汚おしろ城じょうに汚おにわ庭ていじゃしやうがないけどー！」

ミリアはブツクサこぼしながら、三階にある自分の部屋に帰った。

この城は数百年前に、伝説の開祖ランベーシユ・アーダヴァイルトが造らせたものだから、建物

自体は立派である。

古^か黷^びていて、くたびれたまま修繕できてないけれど、まあ味よ、味。

従ってミリアの自室も、王女の部屋に相^ふ応^{さわ}しい広さを持つ。庶民の家ならば、一軒分くらいは余裕であるだろう。

調度品だって安物に入れ替えられてはいるが、一通りはそろっている。

ミリアはこの後、公務があり、着替えのために戻ったのだが、

「……ナニコレ？」

部屋の中に入ってびっくり。

床に矢がぶっすり刺さっているのである。矢羽がいつそ神々しいほどに真っ白だった。

思わず窓を確かめるミリア。

起床後、一度開けるも、出る前にちゃんと閉めていったはずの木戸は、そのままだった。

だったらこの矢は、どこから飛んできたのか？

しやがみ込んで、矯ためつ眇すがめつ眺める。

「まさか、あいつらの仕業!？」

脳裏に浮かんだのは、さっき散々に追い回した悪ガキども。

「イタズラにしても物騒ね！ しかも乙女おとめの部屋にまで侵入して！ 今度会ったら、もう二度とで

きないくらい、とっちめてやらなきやつ」
ミリアは鼻息荒く、ふんずと床から矢を引き抜くと、怒りに任せてベキベキに折って、ゴミ箱へ思クソ叩たたき込んだ。

それから着替えて、何事もなかったかのように謁見えっけんの間へ向かう。

病床の父王に代わって、民の陳情を聞いてやるのだ。

彼らはこのご時世でもまだ、王家の権威を認め、助力をすがる殊勝な者たちである。

無下にするわけにはいかない。
それに、こういった日々の地道な活動によって、

評判が評判を呼んで、いつかは王権復古に繋つながる
と信じている。

女官のお仕着せのままでは舐められるから、—
張羅のドレスでバツチリ着飾った。

ほっかむりも取り払った。

「いざ出陣！」

自室の出入り口の扉を、勢いよく開けるミリア。
勇ましく一步を踏み出そうとして——また妙な
ものを見つけた。

「んんんっ????」

部屋の真ん前、廊下の床に白羽の矢が、ぶっす
り刺さっていたのである。

「さつきまでこんなものなかつたわよ!？」

怪訝けげんそうにしつつも、また怒りに任せて引き抜き、
ベキ折つて捨てる。

「こう執拗しつようで悪質だと、イタズラの範疇はんちゆうを超えて
んじやないのよ!」

憤懣ふんまんやる方なかつたが、謁見の時間が押していた。
イタズラの犯人探しと成敗は後回しにして、廊
下をドスドス歩いていく。

しかし、角を曲がった先で、またも白羽の矢が
壁に刺さっていた。

「邪魔よ!」

ミリアは一瞬の力技で抜き捨て、先を急ぐ。

ミリアは憤怒ふんぬで声にならない絶叫を上げると、もはや鬼神もかくやに矢を抜きまくった。

「ぜい……ぜい……」

ミリアは肩で息をしながら、謁見の間に着する。恐る恐る中を覗のぞくと、もう矢は刺さっていないなかつた。

(ホントに!? ホントに!?)

疑心暗鬼に駆られ、神経質なまでにあちこちを見回すが、一本も確認できない。

ホッと胸を撫なで下ろすと、ようやくいつもの調子を取り戻した。

「ごめんなさい、ちよつと遅れたわ」

謝罪とともに入室し、ミリアは玉座にふんぞり返る。

この豪奢ごうしゃな椅子いすだけは売り払わずにとつてあるし、謁見の間と、正面玄関からここまで続く廊下だけは、内装の手入れと修繕を完璧かんぺきにしてある。フイーナが言うところの、「見栄っ張りの極致」みたいなゾーンである。

隣には、今やこの国で唯一の大臣が立つ。

父国王の親友で、同い年の四十三歳。

有能なのに友情価格で働いてくれる、ミリアにとつても恩人だ。

「今日の陳情は三組『だけ』です、姫」

「なるほど、三組『も』我が王家に助けを求め
る民がいるわけね！」

「……最初のひとりに入ってもらいましよう」

「いいわ、じゃんじゃん持ってきなさい！ 特別
に会ってあげる」

ドヤ顔でうなづくミリア。

出入り口に立っていた二人の儀仗兵ぎじょうへいが、鍛えら
れた喉のどで口上を述べる。

「国王陛下御代理ミリア王女殿下、ご謁見くくく
ッ！」

それから二人で建て付けの悪い両開きの大扉を、

必死こいて———だけど澄まし顔で隠して———ゆっくりと開けていった。

最初のひとりが姿を見せる。

「むっ」

とミリアは目を^{みは}瞠る。

同い年くらいの少年だった。しかもかなりの美形。

ただ、表情がなんとというか……くたびれたオツ

サンみ^{けだる}たいな気怠い感じなのだ。

(^{ただもの}只者じゃあないわね)

そのチグハグな印象に、ミリアは確信めいたものを抱いた。

父に代わり、謁見を始めてもう二年。

その間に様々な人種、職種の者たちと会い、言葉を交わし、人を観る目は肥えたという自負が、ミリアにはある。

「ようこそいらっしやいました——」

ミリアは相手がたとえ王侯でも失礼がないような、最敬礼を以^もつて会釈をした。

「——父の代理を務めております、この国の第一王女。ミリアルージュ・カレンシア・アーダヴァイレルト・エーレンケスターですわ。どうぞ、お見知りおきを」

フィーナが見ていたら、鳥肌を立てるだらうくらいかぶの猫を被る。

平民上がりりの母親の影響で、普段は町娘みたいな言葉遣いをしている（あと、態度も）ミリアだが、その気になればいくらでも王女然と振る舞えるのだ。

教育を受けていたのだ。

すると、少年も受け答えした。

こっちが最敬礼をしてやったのに、あっちは無礼スレスレのざつくばらんさで、

「よお、初めまして。俺おれの名前はリクドー。知ってると思うけど一応、神の端くれだ」
「出てけっ」

ミリアは一切の逡巡しゅんじゅんなく、出入り口を全力で指した。

いきなりのことに、リクドールと名乗った少年は目を丸くしていたが、知ったことではない。

（よりもよってこのあたしの前に？ 神を自称する生物が出てくるとか？ いい度胸じゃないのよ、コノヤロ〜〜〜ツ）

積もりに積もった怨念のあまりに、瞳孔が開ききったような異様な目付きをしまう。

呪詛じゆそのような眼差まなざししを浴びせまくってしまふ。

それでリクドールとやらはたじたじになりつつも、

「あ、いや、出てくわけにはいかねえんだよ」
などと、来意の説明を始めた。

「新たなヴェステルの巫女を迎えに来たんだよ。
信じられねえかもしれないけど——ミリアルージュ
ユ姫。あんたがその巫女に選ばれたんだ。この矢
に見覚えがあるだろ？」

などと、いきなり白羽の矢を取り出してみせた。

「あれ、あんたのイタズラだったの!？」

ミアリアはもう怒りのあまり、前のめりになつて
腰を浮かしてしまふ。

「え？ いや、別にイタズラつてわけじゃ——」
「出ていって」

ミリアは同じ言葉を、今度は冷ややかに言い放った。

リクドーが「そんなバカな」とアホ口を開けていたが、一切の斟酌しんしゃくはなく、氷の笑顔でお引き取り願ったのである。